

ることについては、国際的にも批判が高まりましたし、TPLFもこの政策を非難しています。TPLFにとって強制移住は、支持母体であるティグライ人が連れ去られてしまうことであり、ひいては軍事政権に抵抗する力が弱くなることを意味したからです。

このように、敵対する関係にある双方が行う支援というものは、たいへん異なった性質を持っています。そして、被災民がこうしたプログラムに対してどのように感じていたのかということが、その後の政局にかなり大きく影響しています。ティグライにおいては、飢饉を境にして、それまで以上にTPLFへの支持が拡大します。

1991年にTPLFと国内各地の反政府勢力との連合勢力が、軍事政権を崩壊させ、新しい政権として現在のエチオピアを成立させることになりました。80年代に反政府勢力だったTPLFは、今では政党としてエチオピアの政治の中で活動しています。

現在、RESTはNGOとして国際的な支援の受け皿となり、その支援をティグライ各地に分配する役割を担っています。

### ■ むすびにかえて

現在も、エチオピアには「飢饉のエチオピア」というイメージが染み付いているように思います。1984年の飢饉の際、日本テレビの24時間テレビが大量の毛布を支援物資として送りました。現在もティグライの自分の調査地に行きますと、「君は日本人だろ」と声をかけられます。聞けば今でも日本のNGOから「毛布は要らないか？」というオファーがたくさん来るということです。「なぜ日本人はあんなに毛布を送りたがるのか」とティグライ人から聞かれてしまいました。

この飢饉の状況というイメージを、どういうふうにして日本で伝え続けければいいのかと思います。ティグライ人自身による活動も行われていますから、現在のエチオピアではさまざまな対応が進んでいます。もちろん今でも気候変動の影響や、和平が覆る可能性がないわけではありませんが、こうした懸念を越えたなかで、現在はさまざまな対応が進んでいるのです。

(まき・ももか／津田塾大学)

## 生業の破綻をいかに防ぐか

### — エチオピア西南部の山地農耕民マロ (Malo) の事例から —

藤 本 武

#### ■ 飢饉＝貧困なのか？

私はエチオピア西南部の山村で住み込み調査をしてきましたが、そこで実感しているのは食べ物に豊富にあるということです。

「食べ物に困った時期があるのか」と聞いても、現地の人は「そういうのは大昔にあったようなことを聞いたことがある」というくらいで、自分たちの経験としてはまったく知りません。彼らはだいたい、毎日4回食べていますが、私がちょっと歩いていると、あちこちから「うちで食っていけ」というふうにしょっちゅう食事に呼ばれます。とくに日曜日にはお呼びが多く、8食から9食くらい食べることもあります。そういうわけで、私には、飢饉や飢饉というものは遠いという実感がありますし、人々もそういう感覚を持っていると思います。

さきほど藤田先生のお話のなかに、世界の65億人の人口のうち8億人が飢饉人口であるとありました。しばしばそうした統計で、エチオピアは真っ先に飢饉人口に組み込まれてしまいます。それから、1日1ドル以下のぎりぎりの生活を送っている貧困層が世界に何億人もいるといったことも言われます。しかし、私が調査しているところでは、毎日の生活でお金をそれほど使わないものの、調査の実感からは餓えているという印象はありません。そのあたりがどういうことなのか、また今日変わりつつあるとすればどうして変わってきているのか、といったことについて話してみたいと思います。

人類の生業は伝統的には狩猟採集、牧畜、農耕と区分されます。農耕民は基本的には農作物を主食にしています。そしてほとんどの農耕民は、主

食になる何か軸になる食物を持っています。この依存の割合が大きい作物が、何らかの形で失われてしまうと食糧不足に陥るわけです。

飢餓や飢饉の要因については、自然要因と社会要因といったように大きく分けられますが、基本的にはどういったレベルのものでも自然要因がきっかけになって起こっているといえます。ただ、間接的にその背景にあるものは社会要因だといえます。

ジョン・マルカキスという研究者が1998年の論文で「自給経済には環境変動に応じる力がなく、国家の支援がなければ人々は甚大な被害を被る」と述べています。これは北東アフリカでは環境の悪化で資源争奪が激化していることが紛争の頻発する背景にあるという理解の仕方です。私はここで、このような理解が本当に妥当なのかということ、自分の調査事例から考えていきたいと思います。

#### ■ マロの豊かな実り

エチオピアの西南部地域には、たくさんの少数民族がいます。この地域では、飢饉がゼロとは言いませんが、大規模なものはありませんし、私も聞いたことがありません。エチオピアは飢饉のイメージが強いかもかもしれませんが、西南部はそれと最も遠い地域かもしれません。

私が調査してきた民族はマロといいまして、人口3万～4万人の少数民族のひとつです。ここは高いところで海拔3400m、低いところで1000m以下と高度幅が広いですが、だいたい1000m台と2000m台のところに暮らしています。マロは19世紀末にエチオピア帝国に組みこまれるまでは独立した小さい王国を築いていました。

じつは私もかつて飢饉が本当になかったのかということをしつこく聞いたことがあります。たとえばマロでは1976年、ちょうどエチオピアの帝政が崩壊してほぼ無政府状態に陥っていた時期ですが、そのときに低地に逃れていた旧地主層の残党が銃を持って襲撃してきたという大事件がありました。マロでは1000人くらいが殺されたうえに、家畜が全部連れ去られ、集落も焼かれました。しかし、このときも1日か2日で襲撃者は消えてしまったので、その後、何か長期的に破壊行為が行われたり、占領されたり、また飢饉に苦しむというようなことはなかったと人々は言います。マロは作物を恒常的に外部へ供出しており、少なくとも平時には余剰生産を行っていると思われます。それがどのような形になっているのかを見てみましょう。

マロにとって一番重要な食糧はエンセーテといえます。エチオピアでだけ栽培される作物で、地下の巨大な芋を食べるだけでなくさまざまな部位も利用されます。マロはこれを主要な食糧として



集めてきた野草をゆでる前にととのえる老婆

食べていて、エンセーテを食べない日はないと言うくらいです。ほぼ全世界で栽培していますが、市場価値は低く、基本的に自給用食糧として栽培されています。

またエンセーテのほかにも、サトイモ、ヤマイモ、サツマイモ、ジャガイモ、キャッサバといったさまざまな芋が栽培されています。こうした芋は、家の周りの狭い区画の中で栽培されています。そこに密に利用されているスペースがありまして、ほとんど全種類の芋、香辛料、野菜といったものがたくさん栽培されています。マロでは作物の種類は全部で100種類くらいあります。

その周囲にはもっと広い土地があります。そこでは穀物、豆などを作っています。たとえば2000m以上の高地で豊富に作られる大麦は炒って粉にひいたものを水で練った香煎(こうせん)などにして食べます。

海拔1000m台の低地に行きますと、エチオピア固有のテフという雑穀が広く栽培されています。食べて美味しいということもありますが、換金作物としても重要で、近年栽培が拡大しています。ちなみに30～40年前まで重要だったのは、天候不順には強いけれども市場価値がほとんどないモロコシ(ソルガム)という作物でした。

こうして見ますと、主食になるような作物だけでも芋類・穀類合わせて10種類くらいあり、しかもそれぞれに多くの品種があるということが分かります。

#### ■ 季節的な空腹を和らげるしくみ

それぞれの作物の収穫は季節的に偏りが見られますが、それを和らげる工夫というのも生業体系の中にはあります。穀物の場合、種を播く時期は3～4月ごろ、それから7～8月ごろの二つに分かれます。収穫はそれに比べるともっと限られていまして、大半は11月から1月くらいの時期に集中しています。芋類にもこういった季節性があるものはありますが、もっと緩やかです。

先ほど、低地にはもともとモロコシが栽培され

ていたと言いました。昔はモロコシのなかでも栽培期間が短い早熟型の品種がたくさん作られていました。今ではこの時期に収穫されるものとしてトウモロコシがその役割を担っています。なぜこうなったかという、トウモロコシが簡単に栽培でき収量が多いうえに、実を未熟うちに収穫して焼くなどして簡単においしく食べられるということがあります。5月から7月くらいにかけての時期は、もちろんエンセーテはありますが、穀物はほぼ食べつくしてしまっただけで相対的にお腹がすいてくる時期になります。しかしそれをできるだけ緩和するものとして現在7、8月はほぼ毎日トウモロコシを食べるようになっていました。ただ昔はその役割にモロコシと大麦があったのです。

また先ほど申しましたように、低地ではモロコシに代わって市場価値の高いテフの栽培面積が増えてきています。ほかには小麦なども導入されていて、在来の品種から外来の高収量の品種に置き換わりつつあります。

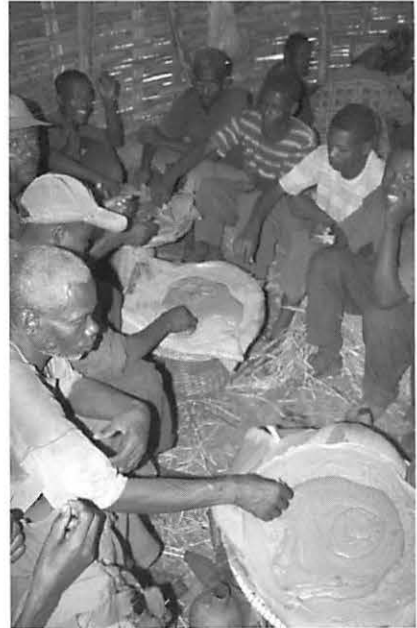
#### ■ 小規模社会の持続性

マロでは近年、商人など、農業をしない人口が増えてきています。そして以前はなかった常設のお店なども見られるようになりまし。また草葺の家からトタン屋根の家への変化も起こりつつあります。これは一見すると、経済的には豊かになり、発展してきているというふうに見えるわけですが、同時に起こっていることも無視できないと思います。

それは連作が慢性化してしまい収量の低下が著しいことです。これはもうほとんどの人が深刻な問題であると言っています。それからできるだけ作付けを拡大しようとして、無理に、森や急傾斜地まで開墾した結果、土壌流出が起こってきています。その意味では環境に対しての無理が露呈しつつあるのではないかと感じています。ですから、表面的には豊かになっていても、生業崩壊を防ぐ仕組みが徐々にほころび始めているように思われるのです。いずれにしても、こうした変化というのは、外の世界との政治的・経済的関係が強まるなかで起こってきているもののように思われます。

マロの事例から示唆されるのは、自給的な経済というのは幅広い柔軟性と多様な代替戦略といった、生業崩壊を防ぐいろいろな仕組みをもととは持っているということです。経済学的には1日1ドル以下で生活する最貧困層に区分されてしまうのかもしれませんが、そうしたところではしばしば食べきれないほど食料が豊富にあります。し

家を建てる共同労働でインシエラがふるまわれる



かし、近代国家の政治体制に組みこまれていくなかで、過大な環境負荷をかけるようになり、いろいろな作物品種を手間をかけて栽培するやり方から、手っ取り早く収量の高い品種の栽培に集中する傾向も起きてきています。その結果、農業の柔軟性といったものが失われてきているのではないかと私には感じるのです。

先ほど、マルカキスの、自給経済には柔軟性がないので国家の働きかけが必要だという説を紹介しましたが、私はそれは、むしろ議論が反対なんじゃないかと感じています。

エチオピアでは、北部で飢饉が頻発し、それはたとえば雨量などの自然要因によるものだと言われてきました。しかしむしろ重要なのは国家支配の歴史だと私は考えます。エチオピア北部では国家支配の歴史が長く、その中で早くから環境が悪化していて、生業が崩壊してしまいやすいという状況におかれているのではないかと考えられます。北部は政治・経済的には発展を遂げてきましたが、持続的な社会であるとはいえないところがあります。それは北部が頻りに飢饉を起こしていることから分かります。それに対して、飢饉に陥らない持続的な社会というのはむしろ、経済的には「貧しい」とされ政治的にも強大なまとまりを形成してこなかった小規模社会のほうなのでは、と私は考えております。

(ふじもと・たけし/人間環境大学)